

# 衣装と自己と、その視線

——ステロタイプの考古学的考現学

佐藤俊樹

東京大学大学院総合文化研究科教授

## Garment, Self, and their Surface: An Archeology of “Stereotype”

Toshiki SATO

Professor, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo, Komaba

I would like to examine the modern relationship between the self and garments, by looking at *The Scarlet Letter* written by Nathaniel Hawthorne and *Public Opinion* written by Walter Lippmann.

The Puritans depicted in *The Scarlet Letter*, a novel set in New England in the 17th century, constantly carried out “endless self-observation” by reflecting on their own behavior to determine whether their deeds are good or bad. In those circumstances, garments were regarded as an undesirable material that covers up the self and hinders “endless self-observation.” At the same time, garments functioned as a means of representing the social class of each individual. In that sense, a flood of clothes was considered to be a threat that could lead to corruption or deterioration of the social order.

I would also like to argue that in today’s highly stereotyped world, garments serve as a means to create a visualization of the self, by looking at the concept of the “stereotype,” as argued by Walter Lippmann, which refers to a widely held perception or fixed image – a preconceived idea or perceived notion in particular. We discover our true self by expressing ourselves through garments. Clothes are a stereotype, through which we find our own self. We express our individuality by recognizing a gap between the self and a stereotype, finding a new self and putting together such new selves, which, I argue, is the relationship between those living in modern days and their clothing.

● 1

自己観察とは不思議なものだ。「我<sup>ゴ</sup>思<sup>ギ</sup>う、ゆ<sup>ユ</sup>えに我<sup>ゴ</sup>有<sup>リ</sup>」。B・パスカルの有名な言葉が、物語るように、近代人とは自己観察する人間であり、むしろ自己観察こそが近代人の近代人らしさの根幹だとされてきた。

ところが、である。よくよく考えてみると、自己観察くらい厄介なことはない。自分が自分を観察するのであれば、その観察する自分もまた観察できる。かくして、自分を観察する自分を観察する自分を観察する……、と無限に連鎖していく。本当に真面目にやっていたら、自己観察だけで一日が終わってしまう。いや、それこそ夢でもうなされそう。

本当の本気でやっていたら、自己観察どころか、疲れ果てて肝心の自己まで消えてしまう。たぶんそこまで徹底してやった人間もいただろうが、そういう人は荒野のまっただなかか、都会の片隅でひっそり亡くなって、忘れ去られる。記録や記憶にのこるのは、その手前ぐらいでとどまった人々だ。

その代表的な例が、これまた近代人の典型の一つとされてきた、17世紀の欧米にいた「清教徒」と呼ばれる宗派の人々である。今日では「禁欲的プロテスタンティズム」という厳めしい名前でも呼ばれる彼ら彼女らは、宗教的な理想にもえて、イングランドからはるばる大西洋を渡り、現在のアメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン付近で独自の社会を創っていた。そこでも、そうした自己観察に日々いそしんでいた。

彼女ら彼らが励んだのは、自己観察のなかでも特に、自分が善であるか(悪ではないか)という問いかけである。そうやって、日々刻々、自分は悪ではないかとつねに自分を監視しつづけたのだ。一日一善ではないが、その日一日に自分がやったことを反省し、どういう善をなしたか、どういう悪をやってしまったのか、毎晩、日記に書き記していくことが熱心に推奨された。

そうやって彼女ら彼らは日々誠実に自分のふるまいを反省し、どんどん善人になっていった、いや、なろうとしていたのだが、そのなかでやはり自己観察の業に苦しむことになった。善をやっている自分をさらに観察し、善である(悪ではない)自分に満足したり誇りに思ったりしている、その自分は善ではないのではないか。そんな疑念に至りついでしまったのである。

かくして、自分は悪ではないと思う自分を反省してその思いは悪ではないかと反省する自分は悪ではないと思う自分を……(以下略)、という無限ループを走り始める。幸いにも(としかかなくとも)、この人たちはかなり实际的でもあり、寝食を忘れて自己観察に耽りはしなかった。むしろ力があまってアメリカ合衆国なんて国家までつくることになるが、そういう人々が送っていた日々の生活は想像できるだろう。食べる、眠る、働く、祈る。そんな必

要最小限だけをひたすらやろうとした。

当時の必要最小限は今とはかなりちがう。異宗派や異教徒が布教を始めたら、捕まえて縛り首にするとか、異宗派や異教徒が侵略してきたら逆に叩きのめして、余力があれば敵の本拠まで攻めて滅ぼす。そんな物騒なものまでふくまれるが、そんな日常から明らかに「必要ない」とされたものもある。いうまでもなく衣服、正確に言えば衣を装う営みである。

## ●● 2

たしかに、自分は悪ではないと思う自分を反省してその思いは悪ではないかと反省する自分は悪ではないと思う自分を……（以下略）という、拷問のような無限ループを走る人々が衣服に気を使う余裕などなさそうだが、現実はまだ少し複雑だったようだ。装うことは、むしろ目の敵にされてきた。衣服それ自体は寒冷な気候に対する身体防御として、そしておそらくは性的興奮をまねかないための視線の遮断としても、必要だとされていたが、そうであることをこえて「装う」のは悪だとされていた。

その暗鬱な色彩、というか色彩のなさを、ナサニエル・ホーソーンは小説『<sup>スカーレット・レター</sup>緋文字』(Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, Ticknor, Reed, and Fields, 1850. 鈴木重吉訳、新潮文庫、1957、訳文は一部変更、以下同じ)の最初の場面で、こう描いている。「くすんだ色の服を着て、灰色のとがった高帽子をかぶったひげ面の男たちの一群が、幾人かは頭巾をかぶり、幾人かは無帽の女もまじえながら、木造の大きな建物の前に集まっていた」(同9頁)。最も華やかな休日のお祭りの広場ですら、「この広場にひろがる人生の絵姿の一般的な色合いは、イングランドからの移民たちの淋しい灰色か茶色か黒で」、そこに「黒い外套と固苦しい垂れ襟ととがった帽子を身に着けた、清教徒の長老たち」が加わる(同238-239頁)。

こうした装うことへの敵視は、贅沢を排除するという面では禁欲の一部でもあったが、自己観察という営みからみると、もっと強い意味があったように思う。自分とは何か、その自己の内側へ無限に沈み込むような視線が、衣装によってさえぎられる。それを防ぐために、装うこと自体を禁圧していた。灰色や茶色や黒の地味な色合いの、型通りの体裁の衣服を身に着けるように強いていた。

裏返せば、自己を問い詰め、考え詰めさせ、それによって自分自身を裸にしていく。そんな視線を飾られた衣装は停めてしまう。たしかに自由に選べる衣装は、その選択の結果として、それを着る人間を語ってしまう。たとえ、それが当人にとっては不本意なものであったとしても、少なくともそこで無限の自己観察の営みは停止する。語られた「自分」、より正確に言えば読み取られた「自分」が本当の自分ではなく思えたとしても、そう誤読した他人の視線の方に焦点が移るからだ。

そういう意味では、装いと近代的な自己との関係は一筋縄でいかない。あえていえば、振

じれた関係にある。表現の自由にふくまれるかどうかはともかく、衣服が自由に選べることは、近代社会の一つの要件だと考えられてきた。装いを選べないことは、個人の自由に対する不当な侵害とされてきた。それをそのまま裏返せば、衣服はそれを着る人間の自己表現であることになる。

しかし、実際には、近代の原型が立ち上がり始めた時期において、装いは積極的に禁止の対象になっていた。近代的な個人は無限の内奥に自己の本体をおこうとした。そういう意味で内面をもつ存在であろうとした。そんな個人のあり方を、自由に選べる衣装はどこかさえぎってしまう。無限ループを走りだすはずの自己観察を停止させ、逆に衣装の方が自己「のような」ものを虚焦点のように可視化してしまう。

近代的な自己が確立され、その後で、そうした自己をもつ個人が自らの表現として、衣服を選ぶ自由を獲得したわけではない。内奥の、本当の自己を見つめ、探し求める自己観察の営みが停まってしまう。そうした自己の探索が放棄される。本来の、あるべき自己をどこにも見つけることができなかつた——。むしろその瞬間に、自由に選べる衣装というものが生まれたのである。装うことと自己との間には、「自己表現」という通り一遍な言葉ではとらえきれない、そんな <sup>パラドキシカル</sup> 逆説的な関係がある。

### ●●● 3

もちろん、それが衣装と近代の全てではない。もう一方において、ファッションは明らかに近代的、いや現代的な事象でもある。

現代の社会、つまり19世紀の西欧で確立され、地球全体にひろまりつつある近代産業社会以外の多くの社会で、衣服の規制は広く見られる。というか、規制がない方がめずらしい。例えば、伝統的な日本語で「禁色」とか「過差」と呼ばれてきたものもその一つだ。現代の感覚ではこれも贅沢の禁止に見えるが、実際には、先ほどのピューリタンたちとは全く別の理由で、個人個人が衣装を自由に選ぶことは認められなかつた。こうした社会では、特定の色の衣装を着ていることが、その人がどんな人間であるか、どんな自己をもっているかを示すとされていた。だからこそ、好きな衣装や装飾を勝手に着けることが許されなかつた。

やや大げさな言い方をすれば、人類の歴史の上ではこうした衣服のあり方の方が圧倒的に旧く、それゆえ根強い習慣でもあった。宗教的な理由から装うこと自体を禁じようとした清教徒たちの社会ですら、それを完全に断ち切ることはできなかつたくらいだ。「深いひだ襟、丹念に細工した帯、派手に縫取りした手袋などは、全て、権力を有するとされる公職者の地位には必要だとされ、階級や豊かさによって威儀を保つ人間たちには簡単に許された。儉約令によって、平民の序列とされた人々にはそうした贅沢品は禁止されていたにもかかわらず」(『緋文字』50頁)。

灰色や黒の色合いが多くを占める祝日の広場でも、「この社会の父親であり創立者であった人々は……伝統的な様式にしたがって、公的で社会的な地位の高さにふさわしい衣装として、外見上の威儀や尊厳を有することが義務である、と考えていた。そうした公職者たちが今、全て姿を現して、民衆の目の前で行列をつくって進み、新たに発足した政府の簡素なしくみに、そうやって必要な威儀をあたえていた」(同236頁)。

学歴や職業や、あるいは名前を勝手に名乗ることに、現代の人々は危険と嫌悪を感じる。それと同じように、こうした社会を生きる人たちは、許されていない色や装飾が身につけられることに危険や嫌悪を感じる。社会秩序への直接的な攻撃に思えるからだ。衣服規制の強化がしばしば贅沢禁止の政策と抱き合わせて打ち出されたのも、そういうつながりだろう。衣装が華美になること自体が悪いというよりも、既存の経済や政治の秩序が緩んでしまった。その証拠というか表象が、無駄で無意味な消費の拡大や、本来なら許されない色や装飾の氾濫なのである。だから抑制しなければならない。

もっといえば、色や衣装の氾濫のむこうに社会秩序の緩みを見出す。そういう考え方自体が近代的な感覚だともいえる。その人間が何者であるかを色や衣装が示している。本気でそう考えている人々にとって、色の配置や衣装の外形やそのそれぞれの間の差異は、人間の間の秩序そのものだ。威厳を纏う服の「<sup>プロキション</sup>行列」は、そのまま社会の「<sup>オーダ</sup>秩序」でもあった。だからこそ、その攪乱や壊乱は政治力や警察力で取り締まるべき、重大な事案だったのである。

例えば、長編成の高速鉄道や日々の通勤通学電車が時刻どおり運転される。あるいは渋谷のスクランブル交差点を多数の人間が一時に、身体の衝突を最小限にとどめながら、向こう側に渡っていく。その風景に現代の日本語圏の人々の多くが安心と、ときには誇りや美をも感じるように、衣服や色がその人間が何者であることを示す社会を生きていた人々は、目の前を行き交う人間たちがそれぞれ許された色や衣装を正しく着ている光景に、きっと安心や誇りや美しさを実感していただろう。

それは彼ら彼女らが色や衣装に鈍感だったからではない。むしろとても敏感で、とても大きな意味を見出していた。だからこそ、そう感じてしまう。そう感じざるをえない。

#### ●●●● 4

そうした感覚を表す言葉は、現在の日本語にもかろうじて残っている。美術や美学が好きな人であれば、たぶん一度は目にしたことがあると思う。「諧調」だ。「美はただ乱調に在る、諧調は偽りなり」のあの「諧調」である。

アナキスト大杉栄の、まさに見事な一句だが、今日ではアナキズムの思想よりも、はるかに簡単にこの言葉は口にされている。裏返せば、安心や誇りすらもたらしてくれる「諧調」の深い美しさを、私たちは知らない。それを心の底から美しいと感じる感性を、今の私

たちはもはやもっていない。だから何の恐れもなく、ただのかっこいいセリフとして、この言葉を平気で口にできる。

裏返せば、そんな社会において衣装はもはや本当の自己を、着ている人間が何者であるかを正しく表すものではありえない。かといって、無限の内奥をもつ不可侵な自己をもつ個人が、自分を表現するものでもない。すでに述べたように、そうした自己を見つける運動が停まったところから、現実の近代を生きる自己と自由に選べる衣装の関わりは始まっているからだ。

それゆえ衣装は、皮膚のような、自己の明らかな一部だともいえない。あえていえば、皮膚の数ミリ上にかぶさった、「皮膚のようなもの」——そう表現するのが一番近い。あるいは、もし美容整形や身体加工が技術としてすっかり普及し、現在の韓国のようにごくあたりまえになれば、衣装は皮膚「のようなもの」というよりも、皮膚が衣装「のようなもの」になるかもしれないが。

そういう意味では、自己と衣装は同じものではないが、相通じている。より正確に言えば、この二つは シンメトリカル 対称的な位置にある。現代の私たちの自己は、皮膚のように身体の表面で可視化されているものではないが、かといって、無限の内奥にすまう不可視なものでもない。むしろその間を、つまり皮膚表面と無限の内奥の間のどこかを、現代の自己は漂っている。

そして、そんな自己とちょうど対称的な形で、現代の衣装も「皮膚のようなもの」として漂っている。その人間の、唯一本当に目に見える部分である皮膚と、明らかにその個人ではない他人の視線との間を。その意味で、衣装と自己は皮膚境界を挟んで双対的な位置をしめる。だから、衣装と自己は同じものではないが、別のものでもない。衣装は自己を何がしか意味づけ、自己は衣装を何がしか意味づける。そんな鏡映しの二つとして、現代における自己と衣装は息づいている (図1)。

だとすれば、最初にのべた近代の起原とされる社会、いわば プロト 原近代社会をつくりだしたピューリタンの人々が衣装に向けた敵意も、本当はもっと屈折したものかもしれない。彼女ら彼らは、本当は自己の無限ループが停止されることを排除したかったのではなく、それが衣装によって停止されることを排除したかったのかもしれない。

実際、彼ら彼女らは別の止め方も知っていた。教会において自らの罪と信仰を告白し、その告白が臨席する他の教会メンバーによって「改心」として認められることで、仮初めにではあるが、本当の自己を承認してもらうこともできた。それによって一時的にせよ自己を見出したことにしてもらえれば、自分は悪ではないと思う自分を反省してその思いは悪ではないかと反省する自分は悪ではないと思う自分を……という無限ループから一時的にせよ解放される。

それに対して、衣装は自己を覆う皮膚の上に「皮膚のようなもの」として、「自己のようなもの」をつくりだす。それによって、無限の自己観察に追い込んでいく視線を、遮断する

というより乱反射していく。他人の不確かな目を通じて実定化されるものにしてしまう。そういう形で、衣装は無限の自己観察を弱めていく。

その点で、衣装と教会は機能的に等価になる。衣装があれば教会は必要なくなるわけではないが、無限ループから一時的にせよ解放してくれる教会への依存度を、衣装は軽くしてしまう。だからこそ教会は自由に装うことを厳しく禁圧しようとしたのではないか。

## ●●●●● 5

そういう意味では、ステロタイプもまた鏡映しの中で息づいている。

ご存じの方も多いだろうが、ステロタイプというのはもともと印刷業の専門用語で、「鉛版」をさす。それを日常的な言葉として普及させたのは、アメリカ合衆国のジャーナリスト知識人であり、第一次大戦中は情報将校として働いた経験ももつ W・リップマンだ。20世紀初めのアメリカ政治の動態をあざやかに描き出した『世論』(Walter Lippmann, *Public Opinion*, Macmillan, 1922, 掛川トミ子訳、岩波文庫、1987)のなかで、現代の民主主義における「事実」や「意見」はいわばステロタイプである、とリップマンは述べている。

人々は客観的な事実そのものを見て、自分自身の考えを語っているわけではない。すでに定型化された何かを観察し、発言しているのだ。

われわれはたいていの場合、見てから定義しないで、定義してから見る。外界の、大きくて、盛んで、騒がしい混沌状態の中から、すでにわれわれの文化がわれわれのために定義してくれているものを拾い上げる。そしてこうして拾い上げたものを、われわれの文化によってステレオタイプ化されたかたちのままで知覚しがちである。(『世論(上)』111-112頁)

われわれは一定の観念を通して外界の光景を観察する。(同120頁)

未訓練者の目で身の回りを観察するとき、われわれがそこから拾い出すのは自分が認識できる記号ばかりである。そうした記号は観念を表徴する記号であり、こうした観念をわれわれは自分の内にたくわえているイメージ群でみたす。われわれは、この人間、あの日没、というように個々別々のものを見ることをしない。これが人間というものである、これが日没というものであると認めてしまった上で、そうした主題についてわれわれの頭にすでにいっぱい入っているものをもっばら見ることになる。(同121-122頁)

鋭敏で辛辣で、ずきりと疼く文章だ。何よりも、今の、自分たちの肖像をつきつけられて

いるようで、読んでいるだけで恥ずかしくなる。

リップマンが『世論』で抉り出したのは、第一次大戦前後の新聞とラジオの時代の赤裸々な姿だが、現在の情報化はそれをさらに進めたものになっている。SNS の氾濫のなかですでに多くの人が気づいているように、ネット社会はリップマンのいう「ステロタイプ」を、人類が全く経験したことのない規模と速度で、文字通り爆発的に増殖させた。情報技術の発展は一方で、より詳細でより正確な情報へのアクセスも容易にしたが、もう一方で、恣意的な決めつけや偏見も全く手軽に拡散できるようにした。それも自分自身の言葉ではなく、他の誰かの言葉をコピー&ペーストしてさらに大量にばらまくことで。

その意味で現代の社会はリップマンの時代よりさらに高度に「ステロタイプ」化されている。ドイツ語圏の社会学者ニクラス・ルーマンが、メディア社会は印刷技術を多重化して高度化したものだとしているが、まさにそんな感じだ (Niklas Luhmann, *Die Realität der Massenmedien* (2Aufl.), S.10, VS, 1996, 林香里訳『マスメディアのリアリティ』10頁、木鐸社、1996)。詳細で正確な情報を苦勞して手に入れる努力よりも、出来あいの決めつけや偏見に自分をゆだねる方がはるかに楽で楽しい。そんな社会をつくりだした (佐藤俊樹「機能分化社会のマスメディア」金子勇編著『変動のマクロ社会』ミネルヴァ書房、2019年)。

## ●●●●●● 6

しかし、リップマンのステロタイプ論をさらに読み返してみると、別の違和感もうかんでくる。彼のかかげるステロタイプが単純すぎるとか、不正確だというわけではない。その反対側の描かれ方が奇妙なのだ。

例えば、民主主義の歴史について彼は次のように書いている。

市民は等しく万能であるという理論は、農村のタウンシップにおいてはほとんどの実際的問題について当てはまっていた。遅かれ早かれ一村のすべての人がその村のすべての行事に手を染めることになる。公職も何でも屋が交代でつとめる。市民が等しく万能であるとするこの理論に重大な支障をきたしたのは、この民主主義のステレオタイプが広い範囲に適用され、人びとが、複雑な文明を眺めた目で囲いこまれた村をみるようになってからである。

……すべての人を知っており、すべての人の仕事に関心がもてるタウンシップのなかでは、十分な公共心が植えつけられていた。タウンシップにとって充分であるという考えから、いかなる目的にも充分だという考えに転じるのは容易である。すでに示したように、ステレオタイプは量的思考を受け入れないからである。……この思考の輪はさらに一回転した。人間は誰もが重要な事柄にそれなりの関心を抱いていると想定されて

いたために、誰もが関心をもつ事柄だけが重要事だと思われるようになったのである。これは人びとの思い描く外界像が、それぞれの頭に何の批判もなく、すでに焼きつけられているさまざまな図柄で形づくられることを示していた。(『世論(下)』111頁)

リップマンは、古き良きアメリカのタウンシップの民主主義と対比させて、20世紀の民主主義がステロタイプに支配されていると語る。念のため断っておくと、だから旧き良き時代のタウンシップの民主主義を復活させるべきだ、と主張しているわけではない。そうしたタウンシップの民主主義が現在でも可能であり、復活させるべきだと語る20世紀の政治家たちこそが、民主主義をステロタイプ化し形骸化させている。ちょうど、こんな感じに語ることで(図2)。リップマンはそう述べているのである。

そういう意味で、彼の批判は「真の民主主義」を安易に語る21世紀の日本の政治家に対しても十分にあてはまるが、注目したいのはそこではない。そんな彼の、鋭いステロタイプ論ですら、やはりステロタイプに依存している。その、骨がらみの抜けがたさである。

例えばタウンシップの民主主義でも、実際には、全ての人が等しく参加できていたわけではない。タウンの人間たちも、「すべての人を知っており、すべての人の仕事に関心をもて」ていたわけではない。旧い住民と新しい住民、あるいは豊かな家族と貧しい家族の間には明確な区別があった。現実には、前者の人間たちだけが、そのタウンを「良く知る」人間だと認められていた。そして、その人々だけがタウンの政治に関与できた。彼らが「関心をもつ事柄だけが重要事だと思われ」ていた。

その意味で、タウンシップの民主主義もまたステロタイプに依りかかっていた。それをあたかもステロタイプであることを免れていたかのように語るリップマンの言葉は、アメリカ建国神話の焼き直しになっている。簡単にいえば、そんな彼の視線もまたステロタイプなのである。

ステロタイプは、ステロタイプでない何かと対照されて、「ステロタイプだ」と認定される。けれども、そのステロタイプでない何かの姿もまた、ステロタイプである。ステロタイプでない何かを対照させながら、私たちはステロタイプを見出そうとするが、実際にはステロタイプの鏡映しをやりつづけている。

## ●●●●●●● 7

こうしたステロタイプのありようから引き出せる最も単純な結論は、「今の世の中にはステロタイプしかない」という見方だろう。凡庸さが支配しきった時代なのだ、と詠嘆調の診断も下してみたいくなる。

もちろん、そんな見立ても決してまちがいではないが、「凡庸だ」と嘆く言葉がしばしば

最も凡庸であるように、やはり一面的だといわざるをえない。そうした見立てもまた、どこかでステロタイプでない何かを仮想しているからだ。

むしろ私たちはつねにステロタイプを通じて、何かを見て、何かを考えている。ステロタイプでない本物の何か、その外にあるわけではない。だとすれば、本当に何かを知ることができるとすれば、何かに気づけるとすれば、それはステロタイプの映しあいのなかでしかありえない。映しあい、同義反復であるはずの二つのステロタイプの間で生じてくる何らかのずれ。たぶん、そこに意味は宿るのだろう。

リップマンの民主主義論に戻れば、旧いアメリカのタウンシップに真の民主主義があって、20世紀はその模倣や仮象を演じていたわけではない。むしろ「タウンシップの民主主義」という像を立てることを通じて、私たちは自分自身の民主主義を考え、そこからタウンシップの民主主義の実態を想像する。そういう転写と差異化をくり返すなかで、自分たちとポリスの民主主義について何かを知ろうとしている(図3)。

だとすれば、あの自己と衣装の鏡映しにも、同じような転写と差異化の運動を見出すことができるのではないだろうか。

自己と衣装においても、真の自己がどこかにあるわけではない。より正確に言えば、真の自己への探求を本当にやりつづければ、結局、無限ループのなかに閉じていかざるをえない。むしろ探求の視線を乱反射させて無効化することで、「自己」を仮初めに具現化しながら自分自身を位置づけていく。現実の近代的個人というのはそういう存在であり、高度にステロタイプ化した現代において、その「自己」を可視化する鏡の一つが衣装なのである。

その意味で、衣装はステロタイプであり、そこに映し出される自己もまたステロタイプである。型の外部に何かがあるのではなく、型を通じて初めて何かが見えてくる、あるいは触れるようになる。夫の不在の間に娘を産んだ罪ゆえに、くすんだ灰色の服の上につねに「姦通 Adultery」を表す「A」の文字が入った赤い布をつけることを強制された『緋文字』の女性主人公、ヘスター・プリンのその緋文字が、彼女に救われた人々の目には「この世ならぬ光に煌めき」、やがて「Able(力ある)」という意味になっていったように(『緋文字』147-148頁)。

厳密に言えば、1850年という刊行年からわかるように、『緋文字』は17世紀のピューリタン社会の記録ではない。19世紀の、産業社会へ離陸し始めたアメリカ合衆国社会の小説である。その時代の人間がむしろ自分たちの鏡として、200年前の清教徒たちを描いたものだ。そうした部分は実はこの小説のあちこちに見出される。例えば「針仕事をするヘスター Hester at her needle」という章ではこんな姿も描かれる。

ヘスターの暮らしは孤独で、顔を見せてくれる友人は一人もいなかったが、生活に困ることはなかった。ある技能を、それを働かす余地は比較的大きくないこの土地でも、彼女と彼女の幼子が食べ物をえるのには十分なくらいに、身につけていたからである。当

時、そして今日でも、女性が握っているほとんど唯一の技能である針仕事だ。……  
少しずつではあるが、ひどくゆっくりというほどではなく、彼女の<sup>ハンディワーク</sup>手仕事は今日であれば<sup>ファッション</sup>流行と呼ばれるだろうものになっていった。……  
彼女にはうまれつき、ゆたかな、なまめかしい、東洋的な性格があって、絢爛と美しいものへの嗜好があって、針仕事の見事な作品以外には、彼女の生活のあらゆる面を見渡しても、それを働かせられるものはなかった。……ヘスター・プリンにとってそれは、彼女の生の熱情を表現し、それゆえ、それを鎮めるやり方だったのかもしれない。(『緋文字』49、50、52頁)

ここに出てくるヘスターの肖像は、罪深い自己をのぞき込み、自らも自らを罰しようとする清教徒の女性からはほど遠い。新大陸アメリカの「服飾デザイナー第1号」、あるいは「最初の芸術家」の誕生、といった方がよい。というか、読めばおわかりのように、ホーソーン自身が本当にそのように書いている。実際、背景と生活の描写をほんの少し変えれば、ココ・シャネルの伝記の一部だといっても通じるだろう。正確に言えば、むしろその意味で『緋文字』は、衣装を選ぶ自己というものが、禁欲的なプロテスタンティズムの無限の自己観察が停まった後に出現してきたことを教えてくれる。

衣装の向こうにそれを着る私がいるのではない。むしろ衣装を通じてしか、私は「私」にはなれない。私たちは衣装で自分を表現しながら、衣装を通じて自分を見出している。それによって、「本当の自己」を一時的に承認してくれる教会や権威や神さまを、なくてもよいものにしつづけながら。そういう形で、現代の私たちは自己を自分自身の上に繋ぎ止めている(図4)。

## ●●●●●●●● 8

「自己とは特殊性と一般性の間の寄生物である」——ルーマンの、そんなあざとい表現がひどくリアルに響いてくるが(Niklas Luhmann, *Gesellschaftsstruktur und Semantik 3*, S.207-208, Suhrkamp, 1989, 「個人・個性・個人主義」高橋徹・赤堀三郎ほか訳『マスメディアのリアリティ』173頁、法政大学出版局、2013)、もしそこに何らかの自分らしさが宿るとすれば、映しあいの中で孕まれるずれにしかない。衣装を通じて「自己」の像を立て、その「自己」と衣装のずれの間からさらなる自分らしさを拾いあげる。そんな形で自分らしさの端切れをつくりだし、それをパッチワークのように貼り合わせながら、現代の私たちは自分らしさを演出しているのだろう。

そういう意味では、現代の衣装は、というか近代的個人が着る衣装は「<sup>レディメイド</sup>既製服」でしかない。既存の型を通じてしか意味を見出すことができないのだから。むしろ、「既製服／オートクチュール」の二項コードをここで持ち出す方が場違いなくらいだ。

オートクチュールの起源は近代より前の衣装、すなわち着る人間の社会的地位を示す指標としての服にある。ピラミッド状の序列をもつ社会において、最上位者は一人しかいない。それゆえ、その人物が着る服は<sup>シンギュラー</sup> 独異なるのでしかありえない。もしそういう人物が着る服を他の人間が着ていれば、それは王様が二人いるのにひとしい。

衣装が社会的な地位を示すからこそ、ただ一人しか着ることがない衣装、ただ一人のためにつくられる衣装に絶対的な意味が見出される。その意味で、オートクチュールは本来、自分らしさを示す服ではない。「<sup>プリムス・インテル・パレス</sup> 第一人者」であることを示す服である。それゆえ、その生産も本来ならば産業にはなりえない。本物の第一人者であれば、自分のためだけの、その意味で唯一無二の服をつくる職人や工房を所有できる。それが最も自然なあり方だ。

逆にいえば、オートクチュールが産業になるには、本来一人しかいないはずの「第一人者」が複数いなければならない。具体的にいえば、「第一人者」の複製コピーが一定数つくりだされ、さらにその周囲に、そうしたコピーになりたいと欲望する人たちがより多く出現してくる必要がある。その二種類の人々、それこそ現代風にいえば「超セレブ」と「セレブ」たちが、オートクチュールの顧客になる。そうやって初めて、特定の人物が自分専用にもっていた、言い換えればその人物の所有物だった工房が独立できるようになる。そのような、いわば不特定少数の人々を相手にして、資本主義的な企業を継続的に営めるようになる。

オートクチュールの生産がデザイナー主導になるためには、そうした転換が必要であった (Francois-Marie Grau, *La batte couture*, Press Universitaires de France, 2000, 中川高行・柳嶋周訳『オートクチュール』白水社選書クセジュ、2012)。たとえ絶対数は多くなくとも、不特定な顧客をもてなければ、作り手側が「自分の服」だと主張できない。王様だけの工房は王様に隷属するものであり、いわばその手足の一部にすぎないからだ。

文芸や絵画など、かつては王侯貴族の地位の表象だったものが、19世紀の産業社会のなかで、芸術家という創造者の作品に変身していく。そうやって芸術というジャンルが成立してくる。オートクチュールもまた、同じようなプロセスをたどって「デザイナーの作品」になっていったが、文芸にせよ絵画にせよ衣服にせよ、それが「作品」であるためには、特定の庇護者の意思に左右されてはならない。だからこそ、芸術は経済的には、不特定の顧客をもつ産業にならざるをえない。

そこにはもう一つの<sup>パラドクス</sup> 逆説がある。芸術が芸術であるためには、数の大小のちがいはあれ、顔の見えない大衆に依存せざるをえないのだ。それが19世紀以降の産業社会のなかで初めて、芸術というジャンルが出現してくるもう一つの理由である。だから、オートクチュールでも、たとえ実際には一着しか製作されなくとも、それは「既製服」になる。作り手が自分らしさの自己表現として服をつくり、それを不特定の顧客が、自分らしさの自己表現の代理として買っていく。そういう作品かつ製品であらざるをえない。

だから、服飾産業としてのオートクチュールもまた、ステロタイプを大量生産する社会の

産物である。「第一人者」の複製コピーが一定数つくられ、それになることで「その他大勢」でなくなると信じられている。つまり、ステロタイプの一部がステロタイプでないかのように観念され、それゆえにそれらの鏡映しの反転像が「ステロタイプ」として発見される。そんなステロタイプの映しあいがつづいていく。

●●●●●●●●●● 9

そういう意味では、オートクチュールのメゾンを訪れて大金を投じていく「セレブ」たちも、小さな公立美術館の企画展に現れる、派手な髪の色と精一杯の主張をこめた上衣と下衣と靴下と靴で武装した、どこかの美大か専門学校の学生さんたちも、渋谷や原宿のファッションビルのカリスマ店員の語りに目を輝かす女の子や男の子も、さらには、お気に入りになれそうな小さな装飾品を通りがかりの店先で見つけて、一瞬の幸せにひたる勤め人たちも、本当は同じなのだろう。

もちろん、だからみんな凡庸だ、といたいわけではない。ステロタイプの映しあいのなかに「自己」の像を見出し、その「自己」とステロタイプとのずれの間からさらなる自分らしさを拾いあげ、そんな端切れを貼り合わせながら、自分らしさを演出する。そんな営みを日々生きていることにおいて、みんな等しく、現代の私たちなのだ。

リップマンはこんな逸話も語っている。

やさしそうな、さる良家の婦人が次のように告白したことがある。彼女の場合、ステロタイプがあまりに重要な意味をもっていて、自分がこうと思っているステロタイプが充足させられないとき、少なくとも彼女は人間の兄弟愛や神の慈愛をも認めることができないのだという。「わたくしたちは不思議なことに、自分の着ている衣服に影響を受けます。衣服は精神的社会的雰囲気を作り出します」。(『世論(上)』118頁)

リップマンが語るこの女性は、おそらく本当にそういう人だったのだろう。けれども、そんな彼女に「良家の婦人」という衣装を着せて語るリップマンの視線もまた、別のステロタイプをきれいなぞっている。だとすれば、衣服の向こうに真の「その人」を見出せるほど「わたくしたち」は賢明ではないように思う——そう素直に告白した彼女の方が、本当は、人と衣服とステロタイプをめぐる何かしらの真実に、触れていたのではないだろうか。

[図版]

図1

自己と衣装の 対称 シンメトリ

- 図2 本物の民主主義と偽物の民主主義  
図3 民主主義の映しあい  
図4 「自己」と衣装の映しあい

## 佐藤俊樹

1963 年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程退学。博士（社会学）。東京大学大学院総合文化研究科教授。専門は比較社会学、日本社会論。著作に『近代・組織・資本主義——日本と西欧における近代の地平』（ミネルヴァ書店、1993 年）、『意味とシステム——ルーマンをめぐる理論社会学的探究』（勁草書房、2008 年）、『社会は情報化の夢を見る——[新世紀版]ノイマンの夢・近代の欲望（河出文庫、1996=2010 年）、『格差ゲームの時代』（中公文庫、2002=2009 年）、『不平等社会日本——さよなら総中流』（中公新書、2000 年）、『桜が創った「日本」——ソメイヨシノ 起源への旅』（岩波新書、2005 年）、『社会科学と印が分析——ウェーバーの方法論から知の現在へ』（岩波書店、2019 年）など。

（肩書は掲載時のものです）